

# 曹魏の関隴領有と諸葛亮の第一次「北伐」

並 木 淳 哉

はじめに

『三国志』蜀書五・諸葛亮伝に

（建興）六年春、揚聲由斜谷道取郿、使趙雲・鄧芝爲疑軍、據箕谷、魏大將軍曹真舉衆拒之。亮身率諸軍攻祁山、……、南安・天水・安定三郡叛魏應亮、關中響震。魏明帝西鎮長安、命張郃拒亮、亮使馬謖督諸軍在前、與郃戰于街亭。謖違亮節度、舉動失宜、大爲郃所破。亮拔西縣千餘家、還于漢中、戮謖以謝衆。

とある。蜀漢の建興六年（二二八、魏の太和二年）に行われた、いわゆる諸葛亮の「北伐」、その一度目を伝える本伝の記事である。

諸葛亮は前年に「出師表」をあらわし、漢中の沔陽県に駐屯していた。彼はまず、長安に向けて北上して郿県を攻めると喧伝し、虚を突いて西のかた天水郡の祁山へと進出する。不意を衝かれ、天水に加えて南安・安定の計三郡が蜀漢に呼応。魏は一時的に長安と河西回廊とが分断される事態となった。ところが情勢は一転する。諸葛亮は馬謖を先鋒として配置していたのだが、街亭で魏の張郃に大敗してしまう。戦線を維持できなくなった蜀漢軍は撤退を余儀なくされ、馬謖は咎を負い処断された。同内容を扱う『三国志』魏書三・明帝紀では「蜀大将諸葛亮寇邊」と記すが、一連の経緯には大差

ない。現代に「泣いて馬謖を斬る」の故事を伝える史実である。また、天水郡で姜維が蜀漢へと降ったのもこの時であった。また、街亭は『資治通鑑』卷七一・魏紀三・太和二年の条の胡三省注や、『三国志集解』の『魏志』明帝紀・太和二年の条が言うように、廢止された前漢の街泉県である。『統漢志』郡国五・涼州漢陽郡の条には、略陽県に属する街泉亭としてあらわれている。天水郡の東部に位置し、ここが破られたことで蜀漢軍は東西から攻め立てられる危険に冒されることとなるのである。

当時、戦線の西方では魏の隴西太守・游楚が蜀漢軍の侵攻を防いでいた。彼の事蹟を伝える『三国志』魏書一五・張既伝の注に引く『魏略』游楚伝には、「三郡叛魏」の顛末についても一歩踏み込んだ記述がある。

太和中、諸葛亮出隴右、吏民騒動。天水・南安太守各棄郡東下、楚獨據隴西、……諸軍上隴、諸葛亮破走。南安・天水皆坐應亮破滅、兩郡守各獲重刑、而楚以功封列侯、長史掾屬皆賜拜。

というように、三郡のうち天水・南安の太守は東下し長安方面へと逃走したというのである。安定太守の去就は不明だが、天水・南安太守のいずれもが、蜀漢へ内通ないし降伏したのではなく、治所を放棄したと明記されている。郡に留まっていた游楚と、逃亡した二人とは、戦後処理において明暗を分けることとなった。この時の天水太守がその治所・冀県でどのような行動をとったかについては、『三国志』蜀書一四・姜維伝に

建興六年、丞相諸葛亮軍向祁山、時天水太守適出案行、維及功曹梁緒・主簿尹賞・主記梁虔等從行。太守聞蜀軍垂至、而諸縣響應、疑維等皆有異心、於是夜亡保上邽。維等覺太守去、追遲、至城門、城門已閉、不納。維等相率還冀、冀亦不入維。維等乃俱詣諸葛亮。

とあり、また同所の注に引く『魏略』では

天水太守馬遵將維及諸官屬隨雍州刺史郭淮偶自西至洛門案行、會聞亮已到祁山、淮顧遵曰：「是欲不善！」遂驅東還上邽。遵念所治冀縣界在西偏、又恐吏民樂亂、遂亦隨淮去。時維謂遵曰：「明府當還冀。」遵謂維等曰：「卿諸人叵復信、

皆賊也。」各自行。維亦無如遵何、而家在冀、遂與郡吏上官子脩等還冀。冀中吏民見維等大喜、便推令見亮。二人不獲已、乃共詣亮。亮見、大悅。未及遣迎冀中人、會亮前鋒爲張郃・費繇等所破、遂將維等卻縮。維不得還、遂入蜀。とある。同文を引用した裴松之が留意しているように、両者の記述には食い違いがあり、登場する人物や冀州城民の対応に関して差がみえる。いっぽう共通しているのは、天水太守（『魏略』によれば馬遵）が冀州に留まることを恐れ、郡の東部にある上邽県へと逃亡したという点である。姜維伝では既に周囲の県が蜀漢へ通じていたといい、『魏略』では馬遵が「吏民樂亂」を恐れ、随行していた姜維らに不信感をぶつける理由となっていた。馬遵の行った判断が『魏略』游楚伝にある天水太守の逃亡を指しているのは間違いない。

舞台となった天水郡は、『三国志』魏書二五・王朗伝附王肅伝の注に引く『魏略』儒宗伝に

天水舊有姜・閻・任・趙四姓、常推於郡中……

とあるように、天水の四姓と呼ばれる名家番付が形成されていた地であった。この箇所は宮崎市定氏の『九品官人法の研究』<sup>(1)</sup>が後漢末の世相を語る際にも引用され、各地域における著姓の発達を伝える典型な史料のひとつである。増淵龍夫氏や東晋次氏<sup>(2)</sup>が説くように、後漢代における地方行政機関の運営は同地の著姓に大きく依拠していた。実際、姜維の姜氏は四姓の筆頭に挙げられている。かれの父は郡の人事を掌る功曹であり、羌族との戦争で郡太守をまもって戦死したのだという。<sup>(3)</sup>姜維伝および『魏略』には、彼とともに梁氏・尹氏・上官氏の名がみえている。いずれも四姓にこそ数えられないが、姜氏と同じように天水郡の有力者であったと窺える。<sup>(4)</sup>なぜ馬遵はこれらに対し強い不信感を露わしたのであるか。周囲の諸県は次々に蜀側へ応じ、南安太守も同じように逃亡したというのだから、すべてを馬遵個人の資質にのみ帰することはできないだろう。

「三郡叛魏」の理由については、『三国志』蜀書五・諸葛亮伝の注に引く『魏略』に

始、國家以蜀中惟有劉備。備既死、數歲寂然無聲、是以略無備預；而卒聞亮出、朝野恐懼、隴右・祁山尤甚、故三郡

## 同時應亮。

とある。劉備の死後、魏ではすっかり対蜀の備えをしていなかったというのである。しかし、劉備の死に伴って諸葛亮が権力を掌握した同年（二三三、魏の黄初四年）、魏の司徒・華歆や司空・王朗らは諸葛亮に向けて藩を称することを求める手紙を送っている<sup>(5)</sup>。当然、魏の首脳部が劉備後の蜀についてまったく無知だったはずがない。都督らにも情報が一定程度は共有されていたはずである。

三郡を含む関中・隴西の一角が曹操政権の影響下へと組み込まれたのは、赤壁の戦い以後から曹操の晩年にかけてである。魏一代を通して都督が置かれ、対蜀戦線の最前線を担った<sup>(6)</sup>。西晋に入っても宗室の有力者が出鎮し、八王の乱末期から永嘉の乱にあつて河間王司馬顥や南陽王司馬保・模父子、そして愍帝の政権が拠り、西晋終焉の地となる。

諸葛亮の「北伐」が始まったころには、関隴が魏の領域となつて既に十年ほどを経過していた。ところが、「三郡叛魏」は起こる。同事件を誘発した地方統治上の脆さは何に起因するのか。それを明らかにすることで、魏の地方行政と地域との関係性について、一端を窺い知ることができるとはないだろうか。その基礎的な試みとして、曹魏政権の開隴への進出過程を追いつつ、いくつかの事象について考察してみたい。

## 一 曹操政権と涼州牧章端

後漢末、董卓政権崩壊（一九二、初平三年）後の軍閥抗争時代に至って、天水（漢陽郡から改称）・南安・安定の三郡は涼州に属していた<sup>(7)</sup>。後漢の涼州は三輔より西の諸郡をすべて管轄していたが、曹操政権下の改廃を経て、魏王朝が成立すると河西回廊の諸郡のみを涼州とし、残り司隸校尉から分けられた三輔を合わせて雍州が置かれた。このため、三郡は「北伐」期には雍州に属している。

天水郡一帯が魏王朝、その前身である曹操政権へと加わるのは、涼州牧・涼州刺史としてあらわれる韋端・韋康父子のときである。後漢末の涼州および魏の雍州士人層の動向については森本淳氏に詳しい検討があり、<sup>(8)</sup> 韋氏政権についても触れられている。以下、森本氏の成果にも拠りながら韋父子について概略をなぞる。

後漢の涼州は、羌族らによる度重なる反乱の温床となっていた。朝廷では涼州放棄論も起る不安定な地域として見なされていた。黄巾の乱と同年の光和七年（一八四）に反乱を起こした韓遂（金城の人）らは、中平四年（一八七）に漢陽郡を陥落させる。この時の太守・傅燮はかれ自身が涼州北地郡の人であり、涼州放棄論に鋭い剣幕で反対論陣を張った人物であったが、反乱軍からの降誘を拒んで戦死した。その頃のこととして、『後漢書』列伝六一・董卓伝には

（隴西）太守李相如反、與遂連和、共殺涼州刺史耿鄙。而鄙司馬扶風馬騰、亦擁兵反叛、又漢陽王國、自號「合衆將軍」、皆與韓遂合。共推王國爲主、悉令領其衆、寇掠三輔。（中平）五年、圍陳倉。乃拜卓前將軍、與左將軍皇甫嵩擊破之。

韓遂等復共廢王國、而劫故信都令漢陽閻忠、使督統諸部。忠恥爲衆所脅、感恚病死。

とある。漢陽の人である王國が盟主とされ、王國が失脚した後は同じく漢陽の閻忠が祭り上げられそうになったが、閻忠は拒みながら病死したという。閻忠は賈詡（武威の人）を人物評価したことも伝わり、天水四姓の閻氏に属する士大夫であろう。反乱軍の盟主となるのを拒否した閻忠であったが、これより先には黄巾の乱鎮圧の功労者であった皇甫嵩（安定の人）に自立をほめかして失敗している。閻忠の拒絶を後漢朝廷への忠心に帰すことはできない。

こうして涼州には韓遂やかれに呼応した馬騰の反乱軍が割拠した状態が続き、曹操政権との接触に至る。

韋端の初見は、建安元年（一九六）に曹操が後漢の献帝を奉戴した後の頃である。『三国志』蜀書六・馬超伝の注に引く『典略』に馬騰のこととして

建安之初、國家綱紀弛弛、乃使司隸校尉鍾繇・涼州牧韋端和解之。徵騰還屯槐里、轉拜爲前將軍、假節、封槐里侯。北備胡寇、東備白騎、待士進賢、矜救民命、三輔甚安愛之。

とある。韋端は曹操が関中に派遣した司隸校尉・鍾繇と同地の慰撫にあたり、これに応じた馬騰は以降一貫して親曹操勢力として行動していくこととなるのである。森本氏が述べるように、<sup>(9)</sup> 韋氏は治所が天水郡の冀県にあったため天水四姓ら同地の有力者を州の従事に迎えていた。

韋端と馬騰は建安十三年ごろまでに都へと召還された。『三国志』魏書二五・楊阜伝に

而端徴爲太僕、其子康代爲刺史、辟阜爲別駕。

とあり、『三国志』蜀書六・馬超伝の注に引く『典略』に

〔建安〕十三年、徴爲衛尉、騰自見年老、遂入宿衛。

とあるように、韋端と馬騰はそれぞれ太僕・衛尉という九卿待遇であった。ともに子の韋康と馬超が継いだ。森本氏はこの代替わりの措置をもって涼州が曹操政権へ組み込まれたと指摘する。<sup>(10)</sup> 韋康は涼州刺史となって世襲を果たしたが、実態は牧から刺史への格下げであったからである。ほぼ同時期には、河西回廊を含む涼州西部が離州として切り離されている。

韋端と馬騰はその根拠地から切り離される代わりに高位で遇された形だが、似た経緯で曹操政権へと参入した軍閥指導者がいる。長安の東、弘農郡に駐屯していた段熲である。段熲は董卓の部将として反董卓連合から長安を守るために同地へ派遣されていた。<sup>(11)</sup> その後、王允による董卓暗殺、董卓故将・李傕らによる長安掌握、献帝の長安脱出と洛陽への帰還、曹操の献帝奉戴と許への遷都……という政局の空転にあつて独立を維持していた。同董卓伝には、李傕の没落後について

〔建安〕三年、使謁者僕射裴茂詔關中諸將段熲等討李傕、夷三族。……後徴段熲爲大鴻臚、病卒。

とあり、『三国志』魏書一〇・賈詡伝の注に引く『献帝紀』には

後以熲爲大鴻臚光祿大夫、建安十四年、以壽終。

とあり、召還されて大鴻臚・光祿大夫となったという。

また、『三国志』魏書二三・鍾繇伝の注に引く『魏略』に

詔徵河東太守王邑。邑以天下未定、心不願徵、而吏民亦戀邑、郡掾衛固及中郎將范先等各詣繇求乞邑。而詔已拜杜畿爲太守、畿已入界。繇不聽先等、促邑交符。邑佩印綬、徑從河北詣許自歸。

とある河東太守・王邑がいる。かれも曹操の派遣した郡太守ではなく、董卓系の残存勢力と見られている。<sup>(12)</sup> どのような身分で徴されたかは不明だが、『三国志』魏書一・武帝紀・建安十九年の条の注に引かれた『献帝起居注』には

使行太常事大司農安陽亭侯王邑與宗正劉艾、皆持節、介者五人、齋束帛駟馬、及給事黃門侍郎・掖庭丞・中常侍二人、迎二貴人于魏公國。

とあり、建安十九年（二一四）に大司農としてあらわれている。段熲・王邑の事例は韋端・馬騰に先行しており、曹操権が友好的に軍閥を吸収しながら徐々に西へ影響を広げていった過程が見て取れる。

曹操政権下における後漢の九卿の地位を窺うものとしては、崔琰伝の注に引く『続漢書』に

建安元年、徵還爲將作大匠・遷少府。每朝會訪對、輒爲議主、諸卿大夫寄名而已。

とある孔融の事蹟がある。孔融は曹操政権下の許都にあつて朝議をリードし鋭気を示していたが、曹操の丞相就任および三公制の廃止に合わせるかのごとく殺されてしまう。<sup>(13)</sup> 時期は韋端・馬騰の召還とほぼ重なる。この事件ののち、九卿の発言力は封殺され、曹操政権の動向へ影響するような政策議論に関わることは出来なくなっていたのである。しかし韋端らは、後漢功臣の子孫や、あるいは献帝が長安から洛陽へ帰還する際に随行した朝臣など、後漢の門閥貴族とも呼ぶべき層と肩を並べたことを果たしたのである。そもそも韋端の京兆韋氏は明らかに名門士大夫層に属し、<sup>(14)</sup> 子・韋誕は書をよくし魏でも高位にのほっている（後述）。いつぼう、馬騰はその後に马超が反乱を起こしたため処刑されてしまう。段熲や王邑の直系子孫は文献上に伝わらないが、かれらとその子孫が貴族社会への扉を開いたことは、汝南・江夏郡に自衛集団をまとめて曹操に通じた李通、<sup>(15)</sup> 黒山の有力指導者で曹操の麾下に入った張燕の子孫の事例を踏まえれば想定可能であろう。

## 二 涼州刺史韋康と馬超の乱

かくして涼州刺史・韋康の代に移った。ところが馬超は韓遂ら諸軍閥と組んで曹操に反旗を翻す<sup>(17)</sup>。曹操自ら征西におよんだ結果、潼関の戦いで馬超ら連合軍は敗北するが、『三国志』蜀書六・馬超伝には

超走保諸戎、曹公追至安定、會北方有事、引軍東還。……超果率諸戎以擊隴上郡縣、隴上郡縣皆應之、殺涼州刺史韋康、據冀城、有其衆。超自稱征西將軍、領并州牧、督涼州軍事。

とあるように、曹操は安定郡まで来たところで軍を引いてしまった。馬超に与した軍閥のひとりで同地に逃げた楊秋を降したが、本拠地たる河北で田銀・蘇伯の反乱が起こったのである。機に乗じて馬超は反撃に出る。近隣の諸郡県は曹操に背き、建安十七年(二二二)、馬超はただ残った冀県の韋康を攻め、降伏させた上でかれを殺してしまう。反発したのは韋氏を立ててきた天水郡の諸氏であった。中心的人物のひとりが故吏の楊阜である。『三国志』魏書二五・楊阜伝の注に引く『魏略』には

阜少與同郡尹奉次曾・趙昂偉章俱發名、偉章・次曾與阜俱爲涼州從事。

とあり、楊阜は同郡の尹奉・趙昂と名声を顕した間柄であった。趙氏・尹氏は「はじめに」で触れた通りである。<sup>(18)</sup>同楊阜伝の本文には

阜內有報超之志、而未得其便。頃之、阜以喪妻求葬假。阜外兄姜敘屯歷城。……計定、外與鄉人姜隱・趙昂・尹奉・姚瓊・孔信・武都人李俊・王靈結謀、定討超約、使從弟謨至冀語岳、并結安定梁寬・南安趙衢・龐恭等。約誓既明、十七年九月、與敘起兵於鹵城。超聞阜等兵起、自將出。而衢・寬等解岳、閉冀城門、討超妻子。……超遂南奔張魯。

とあり、反馬超の結謀に参加した者が列挙されている。この協力者の分布から、韋氏政権の実質的な影響範囲を想定することができよう。天水の人と加えて南接する武都の人が中心となり、北の安定・南安からも応じる者がいた。

楊阜と姜叙が鹵城に拳兵すると、鎮圧に向かった馬超の留守を突いて趙衢らが冀城を占拠する。曹操の將・夏侯淵らの到着もあって馬超は敗退、張魯の支配する漢中へと逃れていった。韋氏政権は自然消滅する形になり、以降、楊阜らは直接曹操に仕える。

楊阜の天水楊氏は四姓の姜氏と通婚関係にあり、安定の梁氏は梁統以来の後漢の名族である。近隣著姓が結集して反馬超の旗を掲げたかに見えるが、『三国志』魏書一八・閻温伝には、

閻温字伯儉、天水西城人也。以涼州別駕守上邽令。马超走奔上邽、郡人任養等舉衆迎之。温止之、不能禁、乃馳還州。という記事もみえる。冀県の落城および韋康殺害より前のことであるが、「郡人」の任養は馬超側についていたという。任氏は四姓のひとつである。

また、『三国志』魏書三・明帝紀・青龍元年の条の注に引く『魏略』佞倖篇には

(孔) 桂字叔林、天水人也。建安初、數爲將軍楊秋使詣太祖、太祖表拜騎都尉。

とある。將軍の楊秋とは馬超とともに曹操へ反旗を翻したひとりであるが、潼関の戦い以前、楊秋と曹操とはあくまで友好関係にあったのであろう。楊秋が曹操と交渉を持つ際、天水の人・孔桂が使者をつとめていたのだという。反馬超の謀議に加わった天水の孔信とは同姓である。楊秋の本籍は不明であり、かれ自身は安定郡に勢力を持っていたようにみえるが、麾下に天水の人がいたということは、かれも楊阜と同じ天水の楊氏を出自とするのかもしれない。<sup>(19)</sup>

そして、南安の龐氏には『三国志』魏書一八・龐徳伝に

龐恵字令明、南安狇道人也。少爲郡吏州從事。初平中、從馬騰擊反羌叛氏。數有功、稍遷至校尉。……後騰徵爲衛尉、

恵留屬超。太祖破超於渭南、恵隨超亡入漢陽、保冀城。後復隨超奔漢中、從張魯。

とある龐徳がいる。かれはかねてより馬騰・馬超父子に従い、冀城を攻める馬超の軍中にもあったが、州の従事をつとめる経歴の持ち主である。

確かに、韋康の復讐を成し遂げたのは天水とその近隣の著姓たちであり、彼ら親韋康・親曹操派の強い意向によって天水郡一帯は曹操政権へ留まることとなった。しかし、馬超側として行動した者の姿も見受けられ、親曹操派と反曹操派になんらかの差異を見出すことは出来ない。当地の有力者たちが両者に分裂したというのが実情であったのだろう。

### 三 韋氏政権と武都郡の遥置

天水の人と武都の人が反馬超謀議の中心となっていたことは先に述べた。天水郡は刺史の治所・冀州を含む地であるが、韋氏政権と武都郡にはどのようなつながりを見出せるであろうか。

楊阜とともに挙兵した姜叙はもともと歴城に駐屯していた。『水経注』卷二〇・漾水には

建安水又東逕蘭坑城北、建安城南、其地、故西縣之歴城也。楊定自隴右徙治歴城、即此處也。去仇池百二十里、後改爲建安城。

とあり、歴城は武都郡に近い西県に位置していた。『三国志』魏書二五・楊阜伝の注に引く『列女伝』には、

姜敘母者、天水姜伯奕之母也。建安中、馬超攻冀、害涼州刺史韋康、州人悽然、莫不感憤。敘爲撫夷將軍、擁兵屯歴。

とあり、姜叙は「撫夷將軍」であったのだという。武都郡周辺は氏族の居住地であるが、かれらのうち韋氏に従っていた者を姜叙は兵を擁して管轄していたのであろうか。

そして馬超敗走後、武都の地を任されたのは楊阜であった。『三国志』魏書二五・楊阜伝には

太祖征漢中、以阜爲益州刺史。還、拜金城太守、未發、轉武都太守。郡濱蜀漢、阜請依龔遂故事、安之而已。會劉備遣張飛・馬超等從沮道趣下辯、而氐雷定等七部萬餘落反應之。……及劉備取漢中以逼下辯、太祖以武都孤遠、欲移之、

恐吏民戀土。阜威信素著、前後徙民・氐、使居京兆・扶風・天水界者萬餘戶、徙郡小槐里、百姓襁負而隨之。

とあり、『華陽国志』卷一・漢中志・武都郡の条には

魏益州刺史天水楊阜治此郡。阜以濱蜀境、移其氏僕於汧・雍及天水・略陽。……其氏僕・楊漢屬魏、魏遙置其郡。

とある。楊阜は益州刺史として武都に治し、のちに金城太守となるが、赴かないうちに改めて武都太守とされた。また、

『三国志』魏書二五・楊阜伝の注に引く『列女伝』には、

趙昂妻異者、故益州刺史天水趙倬妻、王氏女也。

とある。楊阜とともに馬超と戦った趙昂も益州刺史となったようなので、前後して任じられたのだろうか。

武都郡は曹操の漢中攻めと同時に平定の対象となり、抵抗した氏王・竇茂など仇夷（＝仇池）の氏らが征服された。<sup>(20)</sup> 楊阜は武都において韋氏政権から曹操政権に従った者と新たに降伏した者とを合わせて統治したのである。かれの武都太守在任時代に特筆されるのが、郡の「遙置」である。曹操は張魯を降して漢中と巴を得るが、時を同じくして劉備が成都で益州牧・劉璋を降し、蜀に入る。両者は漢中の領有をめぐるって激戦となり、曹操は漢中を放棄して撤退する。漢中放棄により、西接する武都は蜀との境に置かれることとなった。このため、曹操は武都郡を徒す決断をする。『三国志』魏書一五・張既伝には

太祖將拔漢中守、恐劉備北取武都氏以逼關中、問既。既曰：「可勸使北出就穀以避賊、前至者厚其寵賞、則先者知利、後必慕之。」太祖從其策、乃自到漢中引出諸軍、令既之武都、徙氏五萬餘落出居扶風・天水界。

とあり、雍州刺史・張既の献策を用い、早く北へ移った者は厚く報いることにした。こうして楊阜は武都郡の「民・氏」を京兆・扶風（汧県・雍県）・天水（略陽県）の三郡に移住させた。さらに曹丕の代となった延康元年（二二〇）には武都の氏王・楊僕が天水郡に移ったという。<sup>(21)</sup> 武都郡の新治所は扶風の小槐里に置かれた。『太平寰宇記』卷二七・関西道三・雍州三・武功県の条には

小槐里、李奇曰：槐里之西城也。東已有槐里城、以此城爲小槐里。

とあり、槐里県の西方にあったという。以降、武都郡はもとの実土を失い、魏王朝から人的集団として把握される存在となった。楊阜は小槐里の地で移住した人々を管轄していたものとみられる。『三国志』魏書二五・楊阜伝には

文帝問侍中劉曄等…「武都太守何如人也？」皆稱阜有公輔之節。未及用、會帝崩。在郡十餘年、徵拜城門校尉。とある。文帝・曹丕の死まで十数年の間武都太守をつとめ、中央でも顯官を歴任した。

楊阜の後に武都太守となった者としては、韋誕がみえる。馬超に殺された涼州刺史・韋康の弟である。『三国志』魏書二一・劉劭伝の注に引く『文章敍録』に

誕字仲將、太僕端之子。有文才、善屬辭章。建安中、爲郡上計吏、特拜郎中、稍遷侍中・中書監、以光祿大夫遜位、年七十五卒於家。

とあり、同所載の衛恒『四体書勢』には

太和中、誕爲武都太守、以能書留補侍中、魏氏寶器銘題皆誕書云。

とある。韋誕は侍中・中書監・光祿大夫と高官にのぼったが、太和年間(二二七―二三二)には武都太守となったのだという。太和は明帝・曹叡はじめの元号であり、また諸葛亮の「北伐」期にも重なる。韋誕の武都太守就任は楊阜の離任から多く見積もっても数年と経たないうちの出来事であり、あるいは直接の後任であったとも考えられる。时期的にみて、韋誕の武都郡が扶風郡に遙置された武都郡であることは疑いない。韋誕の経歴によると韋康とともに冀州に在ったことは窺えないが、偶然の人事とは言えない。楊阜の仕事を引き継いで、もしくは蜀漢の侵攻に遭って動揺した武都「民・氏」の慰撫のため、旧韋氏政権の縁者が起用されたのだろう。韋康の死から十五年が経ってなお、韋端・韋康父子の記憶は魏王朝に同地の人々への規制力を期待させる、自立した影響力を遺していたのである。<sup>(22)</sup>

移住した武都の人々のうち、天水郡に移った者は略陽県に住んだという。街亭で馬謖が張郃を迎え撃ったとき、近隣にはこのときの武都郡民の集団がいたのである。

## 四 夏侯淵の興国氏攻略

楊阜らが馬超と戦っていたとき、救援したのが夏侯淵であった。夏侯淵は曹操の関中平定軍の頭として縦横無尽に駆け回っており、天水郡もその一環であった。夏侯淵の西征については『三国志』魏書一・武帝紀や魏書九・夏侯淵伝のほか、魏書一七・徐晃伝、同張郃伝などに記載がある。

## 表 夏侯淵の西征路

建安十六年 (一一一)	<p>【三月】 鍾繇・夏侯淵ら張魯討伐へ向かう。馬超・韓遂ら拳兵</p> <p>【七月】 曹操西征、潼関の戦い。成宜・李堪ら戦死</p> <p>扶風の隄糜・汧ら諸県の氏を平定</p> <p>【十月】 安定で楊秋降伏。曹操、鄴へ</p>
建安十七年 (一一二)	<p>【正月】 京兆の藍田に拠る劉雄鳴を討伐</p> <p>左馮翊の郿で梁興を斬る</p>
建安十八年 (一一三)	<p>馬超再起、隴上の諸郡県を引き入れ韋康攻め。韋康は降伏後殺害される</p> <p>韋康への救援間に合わず。馬超と戦い敗れる</p> <p>氏王の阿貴・千万、馬超に呼応。興国城攻め</p>
建安十九年 (一一四)	<p>楊阜ら拳兵、冀城より馬超を追い出す</p> <p>夏侯淵の救援により馬超敗走、呼応していた諸県を降す</p> <p>天水郡から韓遂を追って略陽に至る。韓遂と連携する羌を破る</p> <p>再び興国を攻め、阿貴を滅ぼす。千万は逃亡</p> <p>【十月】 興国より隴西の枹罕を攻め、河首平漢王・宋建を滅ぼす</p>

建安二十年  
(二一五)

【三月】曹操、再び西征の途に就く  
武都で竇茂ら氏を破る

【七月】張魯、漢中より逃亡。このころ曹操と夏侯淵合流か

【九月】七姓夷王・朴胡、竇昌侯・杜濩ら帰順

【十一月】張魯降伏

【十二月】曹操帰還。夏侯淵、漢中の守備を任される

このうち、興国に拠った阿貴・千万と戦った際、略陽県が舞台となつている。かれらは「武都氏」とも記されるが、興国は略陽近郊にあつたようである。阿貴・千万は冀城を落とした馬超に呼応し、天水郡から金城郡にいた韓遂とも連携していた。馬超が天水から敗退したのちのこととして、『三国志』魏書九・夏侯淵伝には

韓遂在顯親、淵欲襲取之、遂走。淵收遂軍糧、追至略陽城、去遂二十餘里、諸將欲攻之、或言當攻興國氏。淵以爲遂兵精、興國城固、攻不可卒拔、不如擊長離諸羌。……淵乃留督將守輜重、輕兵步騎到長離、攻燒羌屯、斬獲甚衆。諸羌在遂軍者、各還種落。遂果救長離、與淵軍對陳。……大破遂軍、得其旌麾、還略陽、進軍圍興國。氏王千萬逃奔馬超、餘衆降。

とある。韓遂を追つて略陽に達した夏侯淵は、興国攻めにかからず、先に韓遂の勢力を追い払うことへ専念した。韓遂およびかれと結ぶ羌を攻略したのち、略陽に戻り、手足のものがれた興国を落とす。『三国志』魏書三〇・東夷伝・倭人の条の注に引く『魏略』西戎伝によれば

近去建安中、興國氏王阿貴・白項（二百頃）氏王千萬各有部落萬餘、至十六年、從馬超爲亂。超破之後、阿貴爲夏侯淵所攻滅、千萬西南入蜀、其部落不能去、皆降。國家分徙其前後兩端者、置扶風・美陽、今之安夷・撫夷二部護軍所典是也。其本守善、分留天水・南安界、今之廣魏郡所守是也。

とある。興国を破つた際、降伏した集団のうち、以前より叛服常ならない者たちは右扶風まで移し、本来従順であつた者

たちは近隣の天水・南安郡に住まわせた。のちに前者は広魏郡（西晋では略陽郡）、後者は安夷護軍・撫夷護軍に管轄させたという。このうち、広魏郡について『晋書』志四・地理志上・秦州には

略陽郡 本名廣魏、泰始中更名焉。統縣四、戶九千三百二十。

とあり、『宋書』志二七・州郡志三・秦州には

略陽太守、晉太康地志屬天水。何志故曰漢陽、魏分立曰廣魏、武帝更名。永初郡國有清水縣、別見。何・徐無。領縣

三。戶一千三百五十九、口五千六百五十七。

とあり、魏の時代に立てられたものである。『三国志』魏書三・明帝紀・景初三年の条の注に引く『魏書』には

九月、蜀陰平太守廖惇反、攻守善羌侯宕蕞營。雍州刺史郭淮遣廣魏太守王贊・南安太守游奕將兵討惇。……詔敕未到、

奕軍爲惇所破；贊爲流矢所中死。

とあり、景初三年（二三八）までには存在している。撫夷護軍については『元和郡縣圖志』卷一・関内道一・雲陽県に

魏司馬宣王撫慰關中、罷縣、置撫夷護軍、趙王倫鎮長安、復罷護軍。劉・石・苻・姚因之。

とある。<sup>24</sup>曹真死後（二三一）、司馬懿が都督雍涼諸軍事を代わった後としているが、県の代替機構として護軍が置かれたという。安夷護軍も同時期か。曹操政權に従順的な姿勢を持っていた者たちは郡太守に管轄される一方、そうでなかった者たちは厳正な軍政の下に置かれて支配されたことがわかる。諸葛亮の「北伐」は魏の青龍二年（二三四）まで続くが、それを防ぎながら徐々に行政区画の整備が進められていたことがわかる。

そして、略陽県には他にも外地から移された集団があった。張魯とともに曹操へと降った、板楯蛮の七姓夷王・朴胡および賈邑侯・杜濩の集団である。

## 五 街亭の戦いと略陽の板楯蛮

『三国志』蜀書九・馬良伝附馬謖伝に

建興六年、亮出軍向祁山、時有宿將魏延・吳壹等、論者皆言以爲宜令爲先鋒、而亮違衆拔謖、統大衆在前、與魏將張郃戰于街亭、爲郃所破、士卒離散。亮進無所據、退軍還漢中。謖下獄物故、亮爲之流涕。

とあり、『三国志』魏書一七・張郃伝に

諸葛亮出祁山。加郃位特進、遣督諸軍、拒亮將馬謖於街亭。謖依阻南山、不下據城。郃絕其汲道、擊、大破之。南安・天水・安定郡反應亮、郃皆破平之。

とある。諸葛亮は、魏延や呉懿といった宿將を推す声を押しのけて馬謖を先鋒に起用した。馬謖は城を避けて、南山に拠り魏軍と対峙しようとする。ところが、魏軍を率いた張郃に水を断たれ、大敗してしまう。

このときの蜀漢軍の陣容については、『三国志』魏書二六・郭淮伝に

太和二年、蜀相諸葛亮相出祁山、遣將軍馬謖至街亭、高詳屯列柳城。張郃擊謖、淮攻詳營、皆破之。とあり、『三国志』魏書三・明帝紀・太和二年の条の注に引く『露布天下并班告益州』には

王師方振、膽破氣奪、馬謖・高祥、望旗奔敗。

とある。張郃は馬謖を破り、郭淮は別に派遣されていた「高詳」もしくは「高祥」を破ったのだという。郭淮に撃破されたのは、蜀側の史料に「高翔」とあらわれる人物だろう。彼は蜀漢において魏延や呉懿に次ぐ重鎮であった。<sup>(26)</sup> また、『晋書』列伝五二・陳寿伝には

陳壽字承祚、巴西安漢人也。……壽父爲馬謖參軍、謖爲諸葛亮所誅、壽父亦坐被髡、諸葛瞻又輕壽。

とあり、『華陽国志』卷七・劉後主志・建興六年の条には

（諸葛）亮使參軍襄陽馬謖、裨將軍巴西王平及張休（＝張沐とも）・李盛・黃襲等在前、違亮節度、舉動失宜、爲郃所破。

とある。『三国志』の著者・陳寿の父が參軍として従軍していたほか、裨將軍の王平や將軍の張休・李盛・黃襲がいた。陳氏は後漢時代に陳禪を輩出した巴西の著姓であり、王平もまた巴西の人である。<sup>(27)</sup>任乃強氏は張休・李盛・黃襲もまた裨將軍で巴西の人であった可能性を挙げているが、なお慎重を要する。<sup>(28)</sup>

蜀漢は後漢の益州一州を版図としていたため、陳寿の父と王平が巴西出身者として軍中に重なる可能性は低くない。ところが、王平の経歴をみていくと、かれが街亭に派遣された理由がみえてくる。王平は、街亭の近くに居住したことがあるのである。『三国志』蜀書一三・王平伝には

王平字子均、巴西宕渠人也。本養外家何氏、後復姓王。隨杜濩・朴胡詣洛陽（↓略陽）、假校尉、從曹公征漢中、因降先主、拜牙門將・裨將軍。

とある。王平が杜濩・朴胡に従って赴いた「洛陽」は、正しくは「略陽」であろう。『三国志』魏書一・武帝紀・建安二十年の条に

九月、巴七姓夷王朴胡・寶邑侯杜濩舉巴夷・寶民來附、於是分巴郡、以胡爲巴東太守、濩爲巴西太守、皆封列侯。とあり、『華陽国志』卷二・漢中志には

（張）魯既有漢中、數害漢使。焉上書言「米賊斷道。」至劉焉子璋爲牧時、魯益驕恣。璋怒、建安五年殺魯母・弟。魯率巴夷杜濩・朴胡・袁約等叛、爲讎敵。……魯勃然曰：「寧爲曹公作奴、不爲劉備上客。」遂委質魏武。武帝拜魯鎮南將軍、封襄平侯。又封其五子、皆列侯。時先主東取江州、巴・漢稽服。魏武以巴夷王杜濩・朴胡・袁約爲三巴太守。留征西將軍夏侯淵、及張郃・益州刺史趙顛等守漢中。遷其民於關隴。

とあり、『華陽国志』卷九・李特雄期壽勢志には

李特、字玄休、略陽臨渭人也。祖世本巴西宕渠賈民、種黨勁勇、俗好鬼巫。漢末、張魯居漢中、以鬼道教百姓、賈人敬信；值天下大亂、自巴西之宕渠移入漢中。魏武定漢中、曾祖父虎與杜濩・朴胡・袁約・楊車・李黑等移於略陽北土、復號曰巴氏。

とあり、『晋書』載記二〇・李特載記には

李特字玄休、巴西宕渠人、其先虜君之苗裔也。……漢末、張魯居漢中、以鬼道教百姓、賈人敬信巫覡、多往奉之。值天下大亂、自巴西之宕渠遷于漢中楊車坂、抄掠行旅、百姓患之、號爲楊車巴。魏武帝克漢中、特祖將五百餘家歸之、魏武帝拜爲將軍、遷於略陽、北土復號之爲巴氏。

とある。建安二十年（二一五）、馬超を破つて関中を平定した曹操は、漢中の張魯を攻める。張魯は漢中から南へ逃げ、しばらく巴に潜伏してから降伏する。この間、張魯とともに行動していた板楯蛮の朴胡・杜濩らも曹操に降る。指導層として登場する朴胡・杜濩・袁約はそれぞれ巴の太守を授けられたが、蜀を得た劉備に攻撃される。曹操はかれらの集団を関中・隴西へ移すことにした。移住地は関中・隴西の各地にあったようだが、杜濩・朴胡らの集団は略陽に住んだ。王平伝では、王平がいったん略陽へ行つた後で対劉備戦に従軍した際劉備側へ降つたというので、曹操が漢中を完全に放棄する前に板楯蛮の略陽徙居が行われ、その後、曹操軍の戦力として動員されたであろう。このとき略陽に移された板楯蛮集団の中から、西晋末の永嘉の乱において五胡十六国の成漢を建てる李氏が頭角をあらわしていく。

王平が街亭に派遣されたのは、略陽付近に住住していた板楯蛮（「巴氏」と呼ばれた）を取り込むためであろう。王平にとつては出身元の集団である。陳寿の父も巴西の有力氏族として同様の任務を帯びていたのかもしれない。目論見は成功しなかった。『三國志』蜀書一三・王平伝に

建興六年、屬參軍馬謖先鋒。謖舍水上山、舉措煩擾、平連規諫謖、謖不能用、大敗於街亭。衆盡星散、惟平所領千人、鳴鼓自持、魏將張郃疑其伏兵、不往逼也。於是平徐徐收合諸營遺迸、率將士而還。丞相亮既誅馬謖及將軍張休・李盛、

奪將軍黃襲等兵、平特見崇顯、加拜參軍、統五部兼當營事、進位討寇將軍、封亭侯。

とある。水を断たれる恐れを顧みず、馬謖は南山を拠点とすることを選択する。馬謖の様子は「舉措煩擾」であったとい、『華陽国志』卷七・劉後主志・建興六年の条でも「舉動失宜」と記されている。すっかり取り乱して、王平が献策しても聞く耳を持たなかったのだという。なぜ馬謖はここまで追い込まれていたのであろうか。それは、進軍してきた相手が張郃だったことに因る。『三国志』蜀書一三・黄權伝に

黄權字公衡、巴西閬中人也。……及曹公破張魯、魯走入巴中、權進曰：「若失漢中、則三巴不振、此爲割蜀之股臂也。」

於是先主以權爲護軍、率諸將迎魯。魯已還南鄭、北降曹公、然卒破杜濩・朴胡、殺夏侯淵、據漢中、皆權本謀也。

とあり、『三国志』蜀書二・先主伝・建安二十年の条に

是歲、曹公定漢中、張魯遁走巴西。……遣黄權將兵迎張魯、張魯已降曹公。曹公使夏侯淵・張郃屯漢中、數數犯暴巴界。先主令張飛進兵宕渠、與郃等戰於瓦口、破郃等、郃收兵還南鄭。先主亦還成都。

とあり、『三国志』蜀書六・張飛伝に

益州既平、……以飛領巴西太守。曹公破張魯、留夏侯淵・張郃守漢川。郃別督諸軍下巴西、欲徙其民於漢中、進軍宕渠・蒙頭・盪石、與飛相拒五十餘日。飛率精卒萬餘人、從他道邀郃軍交戰、山道迤狹、前後不得相救、飛遂破郃。郃棄馬緣山、獨與麾下十餘人從間道退、引軍還南鄭、巴士獲安。

とあり、『三国志』魏書一七・張郃伝に

至陽平、魯降、太祖還、留郃與夏侯淵等守漢中、拒劉備。郃別督諸軍、降巴東・巴西二郡、徙其民於漢中。進軍宕渠、爲備將張飛所拒、引還南鄭。

とある。曹操に降った朴胡・杜濩・袁約らが劉備に攻撃された際、彼らを收容しつつ劉備側の巴西太守張飛と戦ったのが他ならぬ張郃であった。略陽の巴氏にとって張郃はかつての庇護者であり、王平にとっても同じである。諸葛亮が馬謖に

王平をつけたように、魏の明帝・曹叡が張郃をこの地へ派遣したのも同様の意図を見出すことができる。

第一次「北伐」の間、略陽巴氏の動向は掴めない。恐らく、蜀漢になびくことはなかったのだろう。また、王平も蜀漢に降つてからこの時までさしたる功績をもっている訳ではない。張郃を迎え撃つにあたり、馬謖は王平らが敵に呼応するのではと疑うのも無理はない。迫るのは百戦錬磨の相手、馬謖は守りに徹する道を選んだ。『晋書』紀一・宣帝紀・太和五年の条に

進次漢陽、與亮相遇、帝列陣以待之。使將牛金輕騎餌之、兵才接而亮退、追至祁山。亮屯鹵城、據南北二山、斷水爲重圍。帝攻拔其圍、亮宵遁、追擊破之、俘斬萬計。

とある。街亭の戦いから三年後、再び祁山から天水へと侵攻した諸葛亮だったが、司馬懿によつて追い詰められ、鹵城の「南北二山」に拠つて防ごうとしたものの、同じように包囲に遭つて水を断たれ敗走したのだという。馬謖が街亭で取つた判断それ自体は百パーセント悪手とは言えなかったのだろう。

『三國志』魏書九・曹真伝に

安定民楊條等略吏民保月支城、真進軍圍之。條謂其衆曰：「大將軍自來、吾願早降耳。」遂自縛出。三郡皆平。とあり、『三國志』魏書二七・徐逸伝に

明帝以涼州絕遠、南接蜀寇、以逸爲涼州刺史・使持節領護羌校尉。至、值諸葛亮出祁山、隴右三郡反、逸輒遣參軍及金城太守等擊南安賊、破之。

とあるように、蜀漢撤退後も、安定の人楊條が反抗を続け、南安郡にも反魏勢力が残つたようであるが、すぐに鎮圧された。

以上みてきたように、街亭の戦いが行われた略陽県の周辺は、武都郡の「民・氏」、降伏した興國氏勢力の残存、「巴氏」と呼ばれた板楯蛮など様々な集団が集められていた。当然、漢末以前から居住していた郡県の「民」や「夷」もいるはず

であり、かれらと混在していたのである。

今回はたまたま略陽の地が史料上で重なったに過ぎない。板楯蛮は関隴の各地に住んだというのだから、周辺の地域も大なり小なり似た傾向を持っていたはずである。対蜀前線となった政治的宿命とも言える。いっぽう蜀漢側から見てみると、「北伐」の現実的な達成手段として、関隴に点在する諸集団をひとつひとつ引き入れる狙いはあったであろう。しかし、馬謖・王平の街亭派遣はかえって張郃が武名を上げる結果となった。馬遵が天水四姓の姜維らへ向けた不信ではじまった第一次「北伐」は、馬謖が板楯蛮の王平へ向けた不信によって終わったのである。

### おわりに

『三国志』蜀書十三・呂凱伝に

時雍闓等聞先主薨於永安、驕黠滋甚。都護李嚴與闓書六紙、解喻利害、闓但答一紙曰：「蓋聞天無二日、土無二王、今天下鼎立、正朔有三、是以遠人惶恐、不知所歸也。」其桀慢如此。

とある。南中で蜀漢に反旗を翻した雍闓が、蜀漢の李嚴に対して送った文章である。地上に二王のあるはずがないのに三国の分立というのとはどういうことか、遠隔の民はいずれに従えばよいのかわからない——もとより嘯いた主張ではあるが、中原から離れた地で自立的な力をもった軍閥や著姓たちの本音を投影しているのかもしれない。いずれかに従うとは限らない、という選択肢まで含めて。

とくに、長安以西は後漢代、繰り返し放棄論が唱えられた地である。官渡の戦いのころ、楊阜は涼州牧・韋端の従事(31)の身で曹操のもとに派遣されたが、帰還すると関西の諸将から曹操対袁紹の戦いがどうなるか尋ねられたという。同時期で

あるのが、軍閥のひとり楊秋も孔桂を派遣して曹操と交渉を持っていた。また、『三国志』魏書二五・王朗伝附王肅伝の注に引く『魏略』儒宗伝には

薛夏字宣聲、天水人也。博學有才。天水舊有姜・閻・任・趙四姓、常推於郡中、而夏爲單家、不爲降屈。四姓欲共治之、夏乃游逸、東詣京師。太祖宿聞其名、甚禮遇之。後四姓又使囚遙引夏、關移潁川、收捕繫獄。時太祖已在冀州、聞夏爲本郡所質、撫掌曰：「夏無罪也。漢陽兒輩直欲殺之耳！」乃告潁川使理出之、召署軍謀掾。

とある。「はじめに」でも引いた天水四姓の典故、その前後を含む文である。単家の出である薛夏は四姓に遜らなかつたためその身を狙われるが、当時の都であつた許に上り、曹操から知遇を得る。ところが四姓は許のある潁川郡に手を回して、薛夏を投獄させてしまう（曹操の取り計らいで薛夏は助かる）。曹操が河北を手に入れた後という以外いつのこともかはわからないが、天水四姓が遙か遠く許都とコネクションを保持していたことを示している。関中・隴西の諸勢力は、中原の争いから離れた地で自立するいつぼう、天下の行く末を注意深く見守り、次代に向けた身の振り方をはかっていたのである。彼らは中原勢力である曹操政権との接触に至り、ある者は徹底的に対決し、ある者は平和裏に漸次吸収されていく。その過程で板楯蛮といつた外部集団の徙民もあり、関隴の地はいつそうモザイク状に錯綜していった。

馬超が韋康を攻め殺した際、一度は曹操についた周囲の郡県は雪崩をうって馬超についた。オセロの石が一斉にひっくり返るかのような様は、郡県を支える著姓や各郡の領域内に潜む諸集団の存在が、強い自立的傾向をもっていたことを示唆する。寝耳に水とされた蜀漢軍来襲を受けた「三郡叛魏」は、その延長線上にある。かつて韋氏政権を支えた天水の有力者たちは、馬超に断固と反抗し、曹操政権への支持を打ち出していた。ところが、この反馬超行動はあくまでかれらの主体的な選択に基づく行動なのであつて、ほぼ独力で馬超を追い落とし曹操軍を迎えたのである。時勢の判断によつても変わらうる、不確かな親曹操・親魏の姿勢であつた。少なくとも天水太守の馬遵はそう考えていたからこそ、姜維らへの不信を露わにしたのではないだろうか。諸葛亮の「北伐」を受けて、魏王朝の関隴支配がなお脆弱なものに過ぎな

いと露呈させられたのである。

曹魏政権側も手をこまねいていたわけではない。武都の徙郡や興國氏の降伏時にあって、政権への従順さによって峻別し、待遇に差をつけるといった形で集団の分断支配を目論んでいた。あるいは、保持されていた既存集団の力を、政権への背信を理由して削いでいくことも行われたであろう。天水と南安では、諸葛亮に呼応した者は厳しく罰せられたという。<sup>(32)</sup>また関中・隴西の事例ではないが、第一次「北伐」の戦後処理過程で解体された有力な在地勢力がある。後漢末以来、流民を率いて上庸郡一帯に割拠していた申耽・申儀兄弟の勢力である。申耽をはじめ張魯に従っていたが、張魯とともに曹操へ降る。しかし曹操・劉備の漢中争奪戦の余波を受けて劉備の将・孟達らに攻められ、劉備側につく。荊州を守備していた関羽の敗北に伴い、申氏は孟達とともに再び魏へつぐが、このとき申耽は南陽郡に移された。弟の申儀は引き続き郡にあったが、今度は孟達が第一次「北伐」に先んじて蜀漢への復帰を計画する。申儀は同調しなかったが、孟達を倒した司馬懿によってかれも上庸の地を離されることとなった。<sup>(33)</sup>

魏の地方行政は、このように流動化する社会と政権とのせめぎあいを包摂しながら試みられた。都督府は政権と地域社会をつなぐ場として展開し、関隴では、対蜀戦争を指揮する曹真・司馬懿といった都督が存在感を示していく。諸葛亮の「北伐」の時代は、裏を返せば、魏が関隴領有を次第に確立していく時代でもあったのである。

## 注

- (1) 宮崎市定『九品官人法の研究——科挙前史』(東洋史研究会、一九五六年。のち『宮崎市定全集六 九品官人法』(岩波書店、一九九二年))
- (2) 増淵龍夫「所謂東洋的専制主義と共同体」(『二橋論叢』四七—三、一九六二年。のち『新版 中国古代の社会と国家』(岩波書店、一九九六年)に収録)。東晋次「後漢時代の選挙と地方社会」(『東洋史研究』四六—二、一九八七年。のち『後漢時代の政治と社会』

(名古屋大学出版会、一九九五年) に改題収録) など。  
 (3) 『三国志』蜀書一四・姜維伝より。

(4) 梁氏はここで同時に二名が見え、『曹真残碑』碑陰に列挙された「州民」にもあらわれる。『曹真残碑』については、津田資久「曹真残碑」考釈(『國土館東洋史學』一、二〇〇六年、森本淳)「曹魏政権下の「雍州」(『三国軍制と長沙吳簡』汲古書院、二〇一二年。原題「後漢末の東部涼州」(二〇〇七年)、尹氏にはのちに触れる尹奉がおり、また前秦における天水尹氏については藤井秀樹「前秦政権と天水尹氏」(『古代文化』五三―五二、二〇〇一年)がある。上邽県の上官氏は前漢に武帝の側近・上官桀を輩出している。

表 『曹真残碑』碑陰所載「州民」の本籍分布

郡	姓【人数】
京兆	張【1】、韓【1】、趙【2】、郭【2】、宗【1】、韋【1】、尹【1】、鄒【1】、蕭【1】
馮翊	山【1】、李【2】、王【1】、(不明)【1】
扶風	竺【1】、馬【2】、韋【1】、士孫【2】、姜【1】
北地	梁【1】、謝【1】、傅【3】、郤【1】
安定	皇甫【5】、梁【1】、王【1】、胡【3】、郭【2】、楊【1】、梁【1】、(不明)【3】
天水	席【1】、姜【1】、趙【1】、尹【1】、古成【1】、梁【1】、孫【1】
南安	龐【1】
隴西	彭【1】、李【1】、辛【1】
(不明)	(不明)【2】

(5) 同諸葛亮伝の注に引かれた『諸葛亮集』。

(6) 都督制については、越智重明「晋代の都督」(『東方学』一五、一九五八年)、「魏晋時代の四征將軍と都督」(『史淵』一一七、一九八〇年)、小尾孟夫「六朝都督制の研究」(『漢水社』二〇〇六年)、石井仁「參軍事考——六朝軍府僚屬の起源をめぐって」(『文化』五一―三、四、一九八八年)、「都督考」(『東洋史研究』五一―三、一九九二年)、「漢末州牧考」(『秋大史学』三八、一九九二年)、「六朝都督制研究の現状と課題」(『駒沢史学』六六、二〇〇五年)、「地方分権化」と都督制」(『三国志研究』四、二〇〇九年)、「參軍事の研究」(『三国志研究』一〇、二〇一五年)などを参照。

- (7) 南安郡は黄巾の乱後の中平五年（一八八）、漢陽郡を分けて置かれた（『統漢書』郡国志五・涼州に引かれる『秦州記』）。
- (8) 森本淳「後漢末の涼州の動向」（『中央大学アジア史研究』三二、二〇〇八年）、および前掲「曹魏政権下の「雍州」」。
- (9) 前掲「曹魏政権下の「雍州」」。
- (10) 前掲「曹魏政権下の「雍州」」。
- (11) 『後漢書』列伝六二・董卓伝に  
乃使東中郎將董越屯醴池、中郎將段熲屯華陰、中郎將牛輔屯安邑、其餘中郎將、校尉布在諸縣、以禦山東。  
とある。
- (12) 石井仁「黒山・白波考——後漢末の村塲と公權力」（『東北大学東洋史論集』九、二〇〇三年）。
- (13) 『後漢書』紀九・獻帝紀・建安十三年の条に  
夏六月、罷三公官、置丞相・御史大夫。癸巳、曹操自爲丞相。秋七月、曹操南征劉表。八月丁未、光祿勳都慮爲御史大夫。壬子、曹操殺太中大夫孔融、夷其族。  
とある。
- (14) 『後漢書』列伝一六・韋彪伝附韋義伝。
- (15) 李通の子孫は『三国志』魏書一八・李通伝の注に引かれた王隱『晋書』や『晋諸公贊』、および『晋書』列伝十六・李重伝にみえる。李通の曾孫にあたる李重は西晋代に清望があり、九品官人法に関する議論がのこっている。
- (16) 曾孫の張林は八王の乱にあつて趙王司馬倫の腹心のひとりとして活動した。『三国志』魏書八・張燕伝の注に引く陸機『晋惠帝起居注』、『晋書』列伝二九・趙王倫伝など。
- (17) 『三国志』蜀書六・馬超伝の注に引く『典略』に  
建安十六年、超與關中諸將侯選・程銀・李堪・張橫・梁興・成宜・馬玩・楊秋・韓遂等、凡十部、俱反、其衆十萬、同據河・潼、建列營陳。是歲、曹公西征、與超等戰於河・渭之交、超等敗走。超至安定、遂奔涼州。詔收滅超家屬。超復敗於隴上。  
とある。
- (18) 趙氏は四姓のひとつであり、尹氏は姜維とともに諸葛亮へ降った尹賞がいる。
- (19) 前掲津田「曹真殘碑」考釈」や石井仁「六朝時代における関中の村塲について」（『駒沢史学』七四、二〇一〇年）を参照。

- (20) 『三國志』 魏書一・武帝紀・建安二十年の条、同魏書一七・張郃伝、同魏書一七・徐晃伝など。
- (21) 『三國志』 魏書二・文帝紀・延康元年の条には  
 武都氏王楊僕率種人内附、居漢陽郡。  
 とある。
- (22) 韋誕が侍中に遷ったあとの武都郡の詳細は不明であり、魏が蜀漢を平定したのちもとの地へ戻ったとあるが、『晋書』列伝二七・江統伝にあるかれの『徙戎論』には  
 魏武帝皇帝將軍夏侯妙才討叛氏阿貴・千萬等、後因拔棄漢中、遂徙武都之種於秦川、欲以弱寇強國、扞禦蜀虜。……徙扶風・始平・京兆之氏、出還隴右、著陰平・武都之界。  
 とあり、西晋代にも残存の武都氏がいたようである。
- (23) 『三國志』 魏書一七・張郃伝。
- (24) 『太平寰宇記』 卷三一・関西道七・耀州・雲陽県では、「魏志曰」に続けて  
 司馬宣王撫慰關中、罷縣、置撫夷護軍。及趙王倫鎮長安、復罷護軍。後氏羌反、又立護軍、劉・石・苻・姚因之。  
 とあり、一旦廃止された護軍の復置を足している。
- (25) ここに塙としての備えが設けられていたのだろう。
- (26) 『三國志』 蜀書一〇・李嚴伝の注に引く『亮公文上尚書』に  
 輒與行中軍師車騎將軍都郷侯臣劉琰、使持節前軍師征西大將軍領涼州刺史南郷侯臣魏延・前將軍都亭侯臣袁綝・左將軍領荊州刺史高陽郷侯臣吳壹・督前部右將軍玄郷侯臣高翔……  
 とある。これは李嚴が不祥事を起こし弾劾された(二三一、建興九年)際の文章である。劉備から諸葛亮と並んで後事を託されていた。「北伐」軍の陣容を知ることのできる史料だが、高翔はここに劉琰・魏延・袁綝・吳懿と並んで、諸葛亮を除いた五番目にランクされている。街亭の戦い以降のことであるが、彼は馬謖と異なり、街亭戦後に失脚した様子がない。趙一清『三國志注補』では、馬謖死罪の理由として、馬謖が戦後に逃亡したためとの指摘がある。
- (27) 上田早苗「巴蜀の豪族と国家権力——陳寿とその祖先たちを中心に」(『東洋史研究』二五―四、一九六七年)、狩野直禎『後漢政治史の研究』(同朋舎出版、一九九三年)などを参照。

(28) 王平との関連は不明だが、『隸釈』巻五に収録された「巴郡太守張納碑」碑陰では「決曹史宕渠王安」左金曹史宕渠王 $\square$ と、二人の宕渠異王氏を確認できる。

(29) 任乃強『華陽国志校補図注』（上海古籍出版社、一九八七）。「及」の字によって裨將軍・巴西が王平以外の三人にもかかっている可能性である。たしかに、『隸釈』巻五に収録された「巴郡太守張納碑」碑陰には宕渠李氏・充国李氏・閬中張氏・閬中黃氏らが見える。成漢李氏は元來が宕渠県の人といい、閬中黃氏からは蜀漢の黃權が出ている。

また例えば、『華陽国志』巻七・劉後主志の延熙九年の条に

其朝臣・尚書巴西司學・義陽胡博、僕射巴西姚仙、侍中汝南陳祗、並讚事業。

とある「義陽胡博」は胡濟の弟で尚書となった人物であり、尚書が「尚書巴西司學」によって省略されている（劉琳『華陽国志新校注』（四川大学出版社、二〇一五年）で劉琳氏は司學を尚書となった巴西の人・馬齊の誤りとする）。しかし、『華陽国志』巻六・公孫述劉二牧志に

璋復遣護軍南陽李嚴・江夏費觀等督綿竹軍。

とある費觀は、『三国志』蜀書一五・楊戲伝『季漢輔臣贊注』を見ると

觀建安十八年參李嚴軍、拒先主於藤竹、與嚴俱降……

とあり、護軍でなく李嚴の參軍として記されている。「及」をもってかれらを巴西の人と断定するのは難しい。

(30) 前出『華陽国志』漢中志のほか、『太平御覽』卷一一三・偏霸部七・蜀李特に引く『十六国春秋』蜀録にも

其後繁昌、分爲數十姓。及魏武克漢中、特祖父虎歸魏、魏武嘉之、遷略陽、拜虎等爲將軍。內徙者亦萬餘家、散居隴右諸郡及三輔・

弘農。所在號爲巴人。

とある。

(31) 前掲森本「曹魏政權下の「雍州」」。また森本氏は、後漢末の涼州について「自主自衛」の意識が高まったと指摘している（前掲「後漢末の涼州の動向」）。

(32) 『三国志』魏書一五・張既伝の注に引く『魏略』游楚伝では

南安・天水皆坐應亮破滅、兩郡守各獲重刑……

とする。

(33)

『三国志』蜀書一〇・劉封伝には

建安二十四年、命(孟)達從秭歸北攻房陵、房陵太守蒯祺爲達兵所害。達將進攻上庸、先主陰恐達難獨任、乃遣封自漢中乘河水下統達軍、與達會上庸。上庸太守申耽舉衆降、遣妻子及宗族詣成都。先主加耽征北將軍、領上庸太守員鄉侯如故、以耽弟儀爲建信將軍・西城太守、遷封爲副軍將軍。……申儀叛封、封破走還成都。申耽降魏、魏假耽懷集將軍、徙居南陽、儀魏興太守、封員鄉侯、屯洵口。

とあり、同伝の注に引く『魏略』には

申儀兄名耽、字義舉。初在西平・上庸間聚衆數千家、後與張魯通、又遣使詣曹公、曹公加其號爲將軍、因使領上庸都尉。至建安末、爲蜀所攻、以其郡西屬。黃初中、儀復來還、詔即以兄故號加儀、因拜魏興太守、封列侯。太和中、儀與孟達不和、數上言達有貳心於蜀、及達反、儀絕蜀道、使救不到。達死後、儀詣宛見司馬宣王、宣王勸使來朝。儀至京師、詔轉拜儀樓船將軍、在禮請中。

とあり、『晋書』紀一・宣帝紀・太和元年の条に

初、申儀久在魏興、專威疆場、輒承制刻印、多所假授。(孟)達既誅、有自疑心。時諸郡守以帝新克捷、奉禮求賀、皆聽之。帝使人諷儀、儀至、問承制狀、執之、歸于京師。

とある。